

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

民法第二条ニ関スル卑見

(発行年 / Year)

1910

民法第二條ニ関スル卑見

梅 謙次郎

今日苟モ外國人ノ事ヲ論スルニハ鎖國孤
立ノ舊時代ト同シカラス外國ト實際ヲ親
密ニシ互ニ知識ヲ交換シ交々有無ヲ相通
シ相利シ相助ケルノ必要利益ヲ認メサル
ヘカラス故ニ外國ノ沿革及ヒ現状ヲ度外
ニ指クコト能ハス歐米諸國ハ古代未開ノ
時ニ在リテハ皆外國人ヲ禽獸視シ讎敵視

シ之ヲ人ト視ス隨テ之ニ權利ヲ認メス之
ヲ殺スモ殺人罪ヲ構成セス焉ソ權利ノ主
躰トシテ法律ノ保護ヲ求ムルコトヲ許サ
ンヤ然レトモ人文漸ク開ケルニ從ヒ外
國人モ亦人ナリトシ之ニ相當ノ保護ヲ與
フルヲ以テ却テ自國ニ利益アルモノトシ
終ニ進ミテ殆ト之ニ内國人ト同一ノ權
利ヲ認ムルニ至レリ今歐米諸國ノ現状ヲ
左ニ略陳セン

今日仍ホ條約相互主義(佛、白、希、ル、ユ、ク、サ、ン、ブ、)

ル等)法律相互主義(獨、澳、瑞、丹、奧、那威、セルビ、
モナコ等)ヲ取ルノ國ナキニ非スト雖モ漸漸
内外ノ同等主義ニ傾クノ趨勢ヲ呈セリ(露、
伊、蘭、西、葡、暹、馬、羅、馬、尼、等)而シテ其條約相互
主義ト云ヒ法律相互主義ト云フモノモ極
メテ少數ノ權利ニ就テノミ此主義ヲ取レ
ルモノニシテ不動産所有權ヲ首トシ我邦
ノ現行法ニ於テ外國人ニ認メサル權利モ
歐洲ニ於テハ多クハ當然外國人ノ享有シ
得ル權利ニ屬シ敢テ條約若クハ外國ノ法

律ノ規定如何ヲ待タサルモノナリ英米二
國ハ夙ニ賤外主義ヲ以テ知ラルルト雖モ
而モ是レ主トシテ不動産所有權ト相續權
トニ關シ而シテ今日ニ至リテハ莫ハ全ク
此主義ヲ抛テ米モ亦多數ノ州ニ於テ之ヲ
抛テリ(政權ハ各國大抵皆之ヲ外人ニ認メ
ス今ハ私權ノミニ就テ論ス)
請フ左ニ目ヲ分チテ聊カ論スル所アラシ
一 民法第二條ト現行法令
明治ノ初年ニ出テタル法令ニ在リテハ果

シテ外國人無權利ノ原則トシタルカ將タ
外國人モ亦内國ノト同一ノ權利ヲ有スル
ヲ原則トシタルカ事頗ル不明ニ屬スルト
雖モ明治五年第百二十四號布告ヲ以テ外
國人ニ地所ヲ賣渡スコトヲ禁シ翌六年第
十八號布告地所賣入書入規則第十一條ヲ
以テ外國人ニ地所ヲ賣却賣入書入スルコ
トヲ禁シ同年第百五十九號布告日亦坑
法第四條ヲ以テ外國人ノ鑛業ヲ禁シ同八
年第九十五號布告新舊公債證書發行條例

第六條第一節ヲ以テ新旧公債證書ヲ外國
人ニ讓渡シ賣入レ又リ之ヲ抵當ト為スコ
トヲ禁シ同年第百三十號布告ヲ以テ之ヲ
家祿引換公債證書ニ適用シ同年第百三十
一號布告ヲ以テ金札引換公債證書發行條例
ヲ改メ其第六條第一項ニ於テ此種ノ公債
證書ヲ外國人ニ讓渡シ賣入書入スルコト
ヲ禁シ翌九年第百六號布告國立銀行條例
第一條及ニ第三十五條ヲ以テ外國人カ國
立銀行ノ創立者及ニ株主タルコトヲ禁シ

タル等ノ例アルヲ見ルモ未タ某ノ權利ハ
外國人之ヲ享有スト定メタルモノアルヲ
聞カス故ニ明文ナキ權利ハ外國人皆之ヲ
享有スト断言スルコトヲ得サルモ外國人
ハ一切ノ權利ヲ享有セスト曰フコト多ハ
サリレヤ論ナシ何トナレハ一切ノ權利ヲ
享有セサル者ニ就キ土地ノ所有權質權抵
當權國立銀行ノ株主タル權利ヲ有セサル
コトヲ明言スルノ理アラサレハナリ且試ニ思
ヘ苟モ外人ノ來遊ヲ許ス以上ハ其動産所

有權要買貸借等ユリ生スル普通ノ債權ヲ
モ有スルコトヲ認メスト曰フコト餘ハサ
ルハ理ノ尤モ親易キモノニシテ若シ之ヲ
シモ認メスト曰ハハ外人ノ懷中ニ在ル金
錢ヲ奪フモ盜罪ヲ構成セス外人ノ金穀ヲ
借りテ之ヲ還ササルモ敵テ之ヲ訴フルコ
ト能ハスト謂ハサルヘカラス是レ明カニ
維新以來我行政司法ノ諸官衙ノ取レル所
ノ方針ニ及スルハ勿論一般人民ノ觀念ニ
モ反スル所ナリ其後我邦ノ法制漸ク備ハ

リ外人ノ享有スルコトヲ得サルコトヲ明
カニシタル權利較多キヲ加ヘタリ明治十
一年第八号布告株式取引所條例第二十四
條ヲ以テ外國人ヲ取引所ノ株主並ニ仲買
人ト爲スコトヲ禁シタルカ如キ同年大藏
省甲第十三號布達起業公債證書發行條例
第二條第一節及ニ第三條第六節ヲ以テ此
種ノ公債證書ヲ外國人ニ讓渡シ質入シ又
ハ書入スルコトヲ禁シ尚ホ第六條第五節
ヲ以テ其記名證書ニ新旧公債證書發行條

條例第六條ヲ適用シタルカ如キ同第十三
號第四十七号布告金札引換公債條例第三
及第十三條第一項ヲ以テ外國人カ此種ノ
公債證書ヲ引受ケ又ハ讓受クルコトヲ禁
シ尚ホ第十五條ヲ以テ新舊公債證書發行
條例第六條ヲ準用シタルカ如キ同十五年
號第二十六號布告ヲ以テ米商會所條例第九
條第一節ヲ改メ外國人ヲ株主並ニ仲買人
ト爲スコトヲ禁シタルカ如キ同年第三十
二號布告日本銀行條例第五條ヲ以テ外國

人ニ日本銀行ノ株券ヲ讓渡スコトヲ禁シ
タルカ如キ翌十六年第十二號布告新聞紙
條例第七條第一項ヲ以テ外國人カ持主社
主編輯人印刷人ト爲ルコトヲ禁シタルカ
如キ同二十年勅令第二十九號橫濱正金銀
行條例第五條ヲ以テ外國人ニ橫濱正金銀
行ノ株式ヲ讓渡スコトヲ禁シタルカ如キ
同年勅令第四十二號逃亡犯罪人引渡條例
第一條第三項ニ據レハ外國人ハ内國人ト
異ニシテ外國ニ於テ行ヒタル犯罪ニ付キ

外國ニ引渡サルルコトアルヘキモノトシ
タルカ如キ同年勅令第七十五號ヲ以テ新
聞紙條例ヲ改正スルニ當リ其第六條第一
項ヲ以テ外國人カ發行人編輯人印刷人ト
爲ルコトヲ禁シタルカ如キ即チ是ナリ降
テ明治二十三年諸法典ノ發布セラルルニ
及テハ特ニ外國人ニ禁セサル私權ハ皆外
國人之ヲ享有スルコトヲ得ルモノトシタ
ルハ殆ト疑フ容レサル所ナリ是レ旧民法
人事編第四條ニ新民法第二條ノ明文ト粗

同一ノ明文アルノミナラス同第百十二條ニ外國人カ日本ノ養子ト爲ルコトヲ得サルコトヲ定メ民事訴訟法第百八十八條ニ外國人ハ内國人ト異ニシテ其原告タルトキハ訴訟費用ニ付キ擔保ヲ供スヘキコトヲ定メ同第九十二條ニ外國人ハ條約上又ハ法律上相互ノ條件アルニ非サルハ内國人ノ如ク訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得サルコトヲ定メ商法第百二十四條ニ外國人ノ所有ニ屬スル船舶ハ日本ノ國旗ヲ

掲クルコトヲ得サルコトヲ定メタルニ因リテ明カナリ故ニ明治二十三年以後ノ法律ニ在リテハ外國人ニ認メサル私權ハ必ス之ヲ明言スルノ主義ヲ執リタルコト殆ト論ナキ所ニシテ明治二十三年法律第百五十三號集會及政社法第百三條ヲ以テ外人カ政談集會ノ發起人タルコトヲ禁ミ第百二十六條ヲ以テ外國人カ政社ニ加入スルコトヲ禁シタルカ如キ同年法律第百十七號鑛業條例第百三條第一項ヲ以テ外國人カ鑛

業人ト為リ又ハ鑛業組合員若クハ鑛業會社ノ株主ト為ルコトヲ禁シタルカ如キ同二十六年法律第五號取引所法第十一條第一項ヲ以テ外國人カ取引所ノ會員株主又ハ仲買人ト為ルコトヲ禁シタルカ如キ同年法律第十號砂鑛採取法第三條(今ノ第四條)第一項ヲ以テ外國人カ採取人ト為リ又ハ採取業ノ組員又ハ會社員ト為ルコトヲ禁シタルカ如キ同年法律第十四號ヲ以テ集會及政社法ヲ改ムルニ當リ其第五條

第一號及ニ第七條ヲ以テ外國人カ政談集會ノ發起人若クハ講談論議者タルコトヲ禁シ其第二十四條ヲ以テ外國人カ政社ニ加入スルコトヲ禁シタルカ如キ同二十九年年法律第十五號航海獎勵法第一條ヲ以テ外國人ニハ航海獎勵金ヲ下付セサルコトヲ定メ第十一條ヲ以テ航海獎勵金ヲ受クル者カ其船舶ヲ外國人ニ賣渡貸渡交換贈與質入書入スルコトヲ禁シタルカ如キ同年法律第十六號送船獎勵法第一條ヲ以

テ外國人ニハ造船獎勵金ヲ下付セサルコ
 トヲ定メタルカ如キ同年法律第七十號
 移民保護法第七條ヲ以テ外國人カ移民取
 扱人タルコトヲ禁シタルカ如キ翌三十年
 法律第四十八號生絲直輸出獎勵法第一條
 以此テ外國人ニハ生絲直輸出獎勵金ヲ下
 付セサルコトヲ定メタルカ如キ皆其例外
 ヲ掲ケ以テ其原則ヲ知ラシメタリ故ニ民
 法第二條ノ規定ハ現行法令ノ主義ニ合ス
 ルモノト謂ハサルコトヲ得ス

第百五十二條
 外國人ニハ
 造船獎勵金
 下付セサルコ
 トヲ定メタル
 カ如キ同年法
 律第七十號
 移民保護法
 第七條ヲ以
 テ外國人カ
 移民取扱人
 タルコトヲ
 禁シタルカ
 如キ翌三十
 年法律第四
 十八號生絲
 直輸出獎勵
 法第一條以
 此テ外國人
 ニハ生絲直
 輸出獎勵金
 ヲ下付セサ
 ルコトヲ定
 メタルカ如
 キ皆其例外
 ヲ掲ケ以テ
 其原則ヲ知
 ラシメタリ
 故ニ民法第
 二條ノ規定
 ハ現行法令
 ノ主義ニ合
 スルモノト
 謂ハサルコ
 トヲ得ス

二 民法第二條ト各國條約

以上論スル所ハ各國トノ條約ヲ度外ニ指
キタルモノニシテ無條約國民ニ對シ又條
約ノ定メサル事項ニ就テハ條約國民ニ對
シテモ適用スヘキ所ナリト雖モ條約ニ禁
スル所ノモノハ前段ニ論スル所ニ據レハ
外國人ノ享有スヘキ權利モ之ヲ享有スル
コトヲ得ス條約ニ認メタル權利ハ假令前
段ニ論スル所ニ據レハ外國人ノ享有スヘ
カラサルモノト雖モ之ヲ享有スヘキコト

國ヨリ論ラ係タス而シテ現行條約ニ於テ
モ遊歩規程ヲ除ク外特ニ外國人ニ禁シタ
ル權利アルコトナク新條約ニ於テハ未タ
一ノ禁止シタル權利アルヲ見サルカ如ク
唯外國人カ享有スヘキ權利ヲ列擧スルニ
止マレリ世ノ論者之ヲ見テ條約ニ掲ケサ
ル權利ハ即チ外國人ノ之ヲ享有セサルコ
トヲ認メタルモノナリト速了シ民法第二
條ハ諸條約ノ主旨ニ背戾シ我邦カ之ニ由
リテ得タル利益ヲ減却スルモノナリト論

スル者アリト雖モ是レ實ニ駁撃ノ價值モ
ナキ謬説ト謂ハサルハカラス夫レ各國互
ニ條約ヲ結フニ方リテハ其一方ノ國民カ
他ノ國ニ到リテ權利ヲ享有セサルコトヲ
主眼トシテ其條項ヲ定ムルモノニ非ス必
ズ滅ルヘク多クノ權利ヲ享有スルコトヲ
目的トシテ之ヲ定ムルモノナリ然ルニ條
約ヲ以テ明カニ某々ノ權利ヲ享有スヘキ
コトヲ定ムルニ非サレバ他ノ國法ヲ以テ
何時其權利享有ヲ禁スルコトナキテ保セ

ス故ニ國民カ外國ニ於テ享有スルヲ必要
ト認ムル權利ハ各國皆條約ヲ以テ其享有
ヲ確ムルコトヲカムルヲ常トス是レ我邦
ト歐米諸邦トノ間ニ締結シタル條約ニ於
テノミ然ルニ非ス歐米諸邦ノ間ニ締結ス
ル條約モ皆同シキ所ナリ故ニ條約ヲ以テ
外國人ニ享有ヲ許シタル權利ハ國法ヲ以
テ之ヲ禁スルコトヲ得スト雖モ他ノ權利
ニ至リテハ一ニ我國法ノ定ムル所ニ依ル
ヘキカ故ニ我邦ニ於テ之ヲ許スヲ利益ア

リト認ムレハ之ヲ許スヘク之ノ禁スルヲ
利益アリト認ムレハ之ヲ禁スヘク而シテ
外國ハ之ニ對シテ何等ノ抗議ヲ試ムルコ
ト能ハサルモノナリ若シ然ラスシテ論者
ノ説ノ如クンハ我國民カ彼國ニ之クモ條
約ニ認メサル權利ハ假令彼國法ニ於テ一
般ニ外國人ニ認ムルモノト雖モ我國民ニ
限リ之ヲ享有セスト謂ハサルヘカラズ是
レ彼カ當テ主張シタルコトアルヲ論カサ
ル所ナリ以テ諸者ノ説ノ取ルニ足ラサル
ヲ知ルヘシ

三 民法第二條ト外交政略

更ニ眼ヲ轉シテ民法第二條ノ外交政略ニ於ケル關係ヲ視ルニ今日宇内各國互ニ相交通親睦シテ平時ニ在リテハ互ニ他ノ國民ヲ保護スルコト殆ト自國民ニ異ナラス其取ル所ノ主義ハ前ニ論シタルカ如ク概シテ外國人モ亦内國人ト同一ノ私權ヲ享有スト謂フモ可ナルニ唯リ我邦ハ近來漸ク歐米ノ文明國ト同等ノ地位ニ進ミタルニ拘ハラズ仍ホ外國人ハ私權ヲ享有セサルヲ原則トスルトキハ彼ハ必ス曰ハン日本ハ近來勉メテ文明ノ假面ヲ裝フモ未タ半開國ノ域ヲ脱スルコト能ハスト若シ然ラハ我邦ノ將來ノ外交上ニ於テ莫大ノ障礙ヲ見ルヘキハ固ヨリ論ナキ所ナリ殊ニ我邦カ各國ト新條約ヲ結フニ方リテハ既ニ民法第二條若クハ舊民法人事編第四條ノ規定アルヲ見テ必スシモ條約中ニ一切ノ權利ヲ網羅スルコトヲ要セストシ單ニ外人カ我邦ニ來リテ生活スルニ最モ必要

ナル權利ノミヲ列擧スルニ止メタルコト
ヲ推測スルニ難カラサルニ一朝以主義ヲ
改メテ正反對ノ主義ヲ掲グルニ至ラハ將
來新條約ヲ實施スルニ付キ尠カラサル妨
碍ヲ見ルヘキコト殆ト疑テ容レサル所ナ
リ

或ハ曰ク一旦民法第二條ノ原則ヲ採用シ
後日必要ナル範圍内ニ於テ外國人ノ權利
ヲ縮小セント欲スルトキハ猶ホ焉ヨリ甚
シキ障碍ヲ見ント然レトモ條約ヲ以テ定

メサル權利ハ國法ヲ以テ自由ニ之ヲ増減
スルコトヲ得ルモノトスルコト各國皆同
シキ所ナルカ故ニ苟モ外國人ヲシテ一切
我邦ニ生活スルコトヲ得サラシムルカ如
キ野蠻ナル規定ヲ設ケサル限ハ何レノ國
ヨリモ何等ノ抗議ヲ受ケルノ虞アルコト
ナシ而シテ歐米諸條約國民ニ對シテハ最
モ生活ニ必要ナル權利ハ既ニ條約ニ依リ
テ保障セララルヲ以テ斯ノ如キ野蠻ナル
規定ヲ設ケルノ餘地ナシ故ニ苟モ外國人

ハ一切ノ私權ヲ享有セサルヲ本則トスト
云フカ如キ規定ヲ設ケテ徒ラニ外國ノ感
情ヲ害セサル限ハ必要ナル制限ヲ設クル
ニ於テ整ノ支障アルヘカラス猶ホ一步ヲ
進ミテ論スレハ我邦ノ現行法ニ於テ外國
人ニ認メサル權利ハ既ニ歐米諸國ニ於ケ
ルヨリモ多シ以外國人ニ禁スルコトヲ
要スル權利蓋シ幾何モナレ假ニ以他ノ權
利ハ外人皆之ヲ享有スルモノトスルモ敵
テ國家ニ大害ヲ醸スカ如キコトハ斷シテ
之ナキヲ信ス是レ論者カ未ダ嘗テ某ノ權
利ヲ外人ニ認ムルトキハ某某ノ不利アリ
ト云フコトヲ證明セサルヲ見テモ明カナ
リ而シテ多少外人ニ認ムルノ利害ヲ講究
スヘキ權利ハ今ヨリ之ヲ調査スルコト極
メテ易易タルノミ歟ヲ之レ調査セスシテ
漫ニ外人ニ權利ヲ認ムルハ危險ナリト曰
フカ如キハ愚カ取テサル所ナリ

四 民法第二條於正案ノ論評

元田肇外二名ヨリ殺議院ニ提出シタル所
謂民法中改正法律案ナルモノニ據レハ外
國人ハ法律又ハ條約ニ依リ特ニ認許シタ
ル場合ニ於テ私權ヲ享有スルモノトセリ
是レ民法第二條ノ成文ト同様ノ文例ヲ取
レハ外國人ハ法律又ハ條約ニ依リテ認許
セラレタルモノヲ除ク外私權ヲ享有セス
ト爲リ原則トシテ外國人ニ私權ヲ認メナ
ルコトヲ明カニシタルモノナリ此修正案

ノ大體ニ於テ採用スヘカラサルコトハ上
來論シタル所ニ依リテ明カナリト雖モ今
更ニ一步ヲ進ミテ之ヲ論評センニ此修正
案ハ原則ト例外トヲ轉置シタルノ觀アリ
請フ左ニ之ヲ細論セン

私權ノ範圍ニ就テハ從來學者間ニ議論ナ
キニ非スト雖モ民法ニ規定シタル權利ノ
大抵皆私權ニ屬スルコトハ益シ何人ト雖
モ未ダ爭ハサル所ナラン然ルニ民法ニ規
定シタル權利ハ不動産上ノ權利ヲ除ク外

殆ト總テ外國人ニモ認メサルコトヲ得サ
ルモノナルコトハ論者ト雖モ首肯スル所
ナラン例ヘハ動産ノ所有權ヲ認メサルハ
外國人ハ我邦ニ於テ囊中ノ金錢身ニ纏ヘ
ル衣服ノ所有者タルコトヲモ得サルニ至
ルヘク賣買貸借等ニ因リテ生スル債權ヲ
有スルコトヲ得サレハ外國人ハ生活ニ必
要ナル物品ヲ購ヒ貸與シタル金錢ノ返還
ヲ求ムルノ權利ヲモ有セサルニ至ルヘク
不當利得不法行為ニ因リテ生スル債權ヲ

有スルコトヲ得サレハ外國人ノ財産ヲ横
領シタル者モ之ヲ返還スルコトヲ要セス
況々之ニ損害ヲ加フルモ敢テ之ヲ賠償ス
ルコトヲ要セスト謂ハサルヘカラス斯ノ
如クンハ外國人ハ到底我邦ニ棲息スルコ
ト能ハサルヘキカ故ニ論者ト雖モ此等ノ
權利ハ之ヲ外國人ニモ認ムヘキコトヲ肯
セサルヘカラス若シ然ラハ民法ニ規定シ
タル各種ノ權利ニ付キ外人モ亦之ヲ享有
スヘキコトヲ明言セサルヘカラス斯ノ如

クシハ第二條ニ規定セント欲スル所ノ原則ハ其實原則ニ非スシテ例外ト爲リ而モ其例外ハ殆ト之ヲ民法中ニ見ルコト能ハサルニ至ラン是レ徒ラニ外國ニ在リテハ陳腐ニ屬セル原則ヲ掲ケテ外國ノ感情ヲ害スルノ結果ヲ惹起スニ過キス而モ實際ニ於テハ何等ノ必要ナキノミナラス法典ノ條款トシテモ原則ト列外トヲ轉置スルノ非難ヲ免レサルヘシ
論者ハ私權ノ範圍ニ付キ學者間ニ議論ア

ルヲ口實トシテ況ク外人ニ私權ヲ認ムルノ危險ヲ詭クト雖モ愚ハ如何ニ廣義ニ私權ヲ解釋スルモ救テ弊害ナキヲ信ス例ハ版權特許權意匠權商標權ノ如キ廣義ノ私權中ニハ之ヲ包含セルコト勿論ナリト雖モ原則トシテ之ヲ外國人ニ認メサル必要アリヤ否愚ハ大ニ之ヲ疑ヘリ歐洲ニ於テハ多少ノ制限ヲ加フルモノハ之アリト雖モ原則トシテハ大抵之ヲ認メタリ我邦ニ於テモ法律ヲ以テ多少ノ制限ヲ加フル

ノ必要ハ之アルヘシト雖モ敢テ之ヲ外國
人ニ禁スルコトヲ要セサルカ如シ假ニ之
ヲ禁スル必要アリトスルモ條約國ニ對シ
テハ既ニ條約ノ明文ヲ以テ之ヲ認ムルカ
故ニ今之ヲ禁スルニ由ナシ若シ夫レ無條
約國人ニ對シテハ一片ノ命令ヲ以テ之ヲ
禁スルコトヲモ得ヘシ故ニ之カ爲メニ民
法ノ原則ヲ轉倒スルノ必要ハ斷シテ之ア
ラサルナリ

上來論スル所ニ據レハ外國人ニ認メテ可

ナル權利ハ遙ニ外國人ニ禁スヘキ權利ヨ
リモ多キコト殆ト疑ヲ容レスト雖モ假ニ
其數粗相如クモノトセンニ愚ハ寧ロ第二
條成文ノ如ク規定スルノ愈レルコトヲ信
ス蓋シ如何ナル原則ヲ取ルモ必ス各種ノ
權利ニ付キ之ヲ外國人ニ認ムヘキヤ否ヤ
ヲ講究セザルヘカラス若シ然ラハ實際ニ
於テハ如何ナル原則ヲ取ルモ異ナルコト
ナシ然ルニ外國ニ於テハ既ニ陳腐ニ屬セ
ル原則ヲ我民法中ニ掲ケテ徒ラニ外國ノ

感情ヲ害スルハ豈ニ策ノ得タルモノナラ
ニヤ況ヤ此原則ハ其適用極メテ狭ク實際
例外タルノ觀アルヘキニ於テ又ヤ

五 民法第二條削除案ノ論評

民法第二條ノ原則ハ今日ノ歐洲ニ於テハ殆ト言フヲ待タサルモノナリ故ニ之ヲ削除シテ守ナリトハ鳩山和夫等カ唱道スル所ナリ蓋シ民法編纂ノ初ニ當リ此論出テタランニハ或ハ之ヲ採用スルモ可ナリシナラン然レトモ一旦法律トシテ發布セラレタル民法中ヨリ特ニ此一條ヲ削除スルトキハ外國人ハ勿論内國人ト雖モ反對ノ原則ヲ採用シタルモノトモ解スル者アル

ヘキヤ明カナリ而シテ民法第二條修正案ヲ可トスル者ハ必ス此解釋ヲ取ルヘキコト固ヨリナリ故ニ今ニ追テ第二條ヲ削除スルハ不可ナリ況ヤ歐米ニ於テモ未ダ全ク第二條ノ原則ヲ採用スルニ至ラズ殊ニ我邦ニ於テハ現ニ第二條修正論者ノ如キ狹隘ナル思想ヲ有スル者尠カラサルニ於テヤ

結論

之ヲ要スルニ民法第二條ハ能ク學理ニ合
ナヒ實際ニ適シ些ノ弊害ナク些ノ危険ナ
シ故ニ今之ヲ改ムルノ必要ナシ而シテ元
田肇等ノ修正案及ヒ鳩山和夫等ノ削除案
ハ兩ナカラ採用スヘキ限ニ在ラスト信ス